たたかう労働組合・回転寿司ユニオンに総結集して、労使関係正常化闘争を完遂しよう！

労使関係の正常化をめざして

14

2026/3/18

編集・発行：回転寿司ユニオン

つまりゼンセン第二組合が嘘をついてオルグしているということ？！
はなまる会社、第二組合とのチェックオフの合意を明確に否定！

「めざして」12号で、はなまる（根室花まる）会社が、回転寿司ユニオンには従前から拒否していたチェックオフ（組合費の給与天引き）を、第二組合には認めたことについて不当労働行為であると断じた。そもそも私たちが、会社と第二組合との間にチェックオフ協定が締結されたとする根拠は、同号に引用したとおり、第二組合がオルグ用に配布している冊子に記載された「組合費は、毎月の給与から天引きされ」るとの文言である。

ところが、今月13日に開催した回転寿司ユニオンとの団体交渉において、はなまる会社は①ゼンセン第二組合とチェックオフ協定を締結したことはない、②そもそも第二組合との間でそのような議題で話をしたこともない、③今後も第二組合にチェックオフ協定を認めることは考えていない、と明らかにしたのである。これはどういうことか。まさか会社が団体交渉の場でここまで堂々と虚偽の回答をするとは思えないから、そうすると、ゼンセン第二組合が会社とそんな合意も話合いもしていないのにこのような嘘をついてオルグをしているということだろうか。

現在、職場では管理者たる店長が就業時間中にもかかわらず従業員をつかまえて、ゼンセン第二組合への加入申込書を書かせているようだが、かれらもこの事実を知らされているのか。甚だ疑問である。

「躍進大会」になぜか稲盛和夫氏「経営の原点12ヶ条」　経営の代弁者であること自白！

ところで、その第二組合が今月11日に「躍進大会」を開催したとゼンセンのホームページに掲載されている。

しかし不穏なのは、掲載されている写真の背景である。演壇後ろのホワイトボードには「躍進大会」の横断幕が貼られているのだが、その向かって少し左に「経営の原点12ヶ条」と題された紙が貼られているのである。「経営の原点12ヶ条」とは、京セラや第二電電などを創業し、その「経営哲学」が一部の経営者には尊崇されている稲盛和夫氏（故人）の提唱する「理念」である。はなまるの創業者であり現会長の清水鉄志氏も稲盛「哲学」にいたく共鳴されているようだが、経営側に経営の「哲学」や「論理」があるように、労働者には労働者の哲学や論理があるわけで、労働組合というのは当然後者を代弁するものでなければならない。

ところが第二組合の「躍進大会」にはなぜかこれが貼付されているのである。どういう経緯でこうなっているのかは与り知らぬが、いずれにしても真に労働者の利益を代表する労働組合なら、到底こうはならない（貼らない・剥がす）だろう。すなわち、第二組合が現場ではたらくなかまのためのものではなく、経営の代弁者として存在していることを自白したも同然だということである。

ちなみにこの12ヶ条のうち第5条は「売上を最大限に伸ばし、**経費を最小限に抑える**」である。ご承知の通り、資本が経費を最小限に抑えたいとき、もっとも買い叩きやすいものは、労働力（賃金）である。こうした資本の習性を前に、これに反対してあくまでも適正な対価（賃金）を求めるのが労働組合の役割だと考えるが、どうも第二組合の場合はそうでないようだ。

だが、これで私たち回転寿司ユニオンと第二組合、どちらがはたらくなかまのためにたたかう労働組合であるかは一段とはっきりしただろう。はなまるではたらくみなさん、店長にゼンセン第二組合への加入届を書かされそうになっても頑として拒否し、一刻も早く回転寿司ユニオンに加入しよう！